続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第７回

○ウカルキナイ（川）

「ウカルキナイ」は、上庶路地区で庶路川が大きくカーブしているところから北東方向へ向かっている川の名前です。

「ウカラ（ウカラという遊び）・キ（…をする）・ナィ（沢）」という意味で、「こん棒で打ち合う遊びをする沢」のことを言います。永田方正は『北海道蝦夷語地名解』で「遊戯澤」と訳しています。

■ウカラという遊び

「ウカラ」について、知里真志保博士は「ウ（お互い）・カラ（打つ）」という意味で、「お互いが打つ」「打ち合う」ことであると述べています。その「打ち合い」は、①紛争が口論（チャランケ）で解決しない場合の手段、②うっぷんがあったときの和解の手段、③何かを決定するときの方法（試合・武技競べ）で、それが後にスポーツのような遊びになり、興行的な行事にまでなったと説明しています。そして、そのときの道具となったこん棒は、本来は狩猟具で、サケの頭をたたく棒が代表例です。

【参考／『知里真志保著作集１』「樺太アイヌの説話（一）」知里真志保著】

○オンタシナイ（川）

「オンタシナイ」は、宮崎神社のあたりで庶路川から西に分かれ、縫別に通じる町道上庶路本流線に沿って流れている川です。

「オ（川尻）・ム（ふさがっている）・タッ（カバノキ）・ナィ（沢）」という意味があります。

カバノキは、アイヌの人たちにとって使い道の多い木でした。皮は各種の容器をつくる材料になったほか、ダケカンバは、樹皮の薄皮を傷口に貼って包帯のように使い、シラカンバは、樹液を飲んだり、砂糖の代用にしたり、発酵させて酒造りにも使われていました。

【参考／『アイヌ民族の有用植物～薬用・植物編』北海道立衛生研究所ほか】

○ルーオンネナイ（川）

「ルーオンネナイ」は、町道上庶路本流線が道道２４２号に突き当たったところの先で庶路川から北東へのびている川です。

「ル（道）・オンネ（大きい）・ナィ（沢）」という意味があり、川に沿って道があったことを示しています。

鎌田正信は『道東地方のアイヌ語地名』で「この沢沿いの路は裏側の阿寒町知茶布川に通じていたことが窺われる」としています。

知茶布川は舌辛川の支流であることから、この地名の「ル（道）」は、小助川濱雄が記した「白糠村字庶路より入り、舌辛太、阿寒湖西岸を経て釧路、北見国境の山脈を越え、網走川に沿いて下り、新栗履（現大空町）に出づ」という「網走越（網走山道）」のもとになったアイヌの人たちの踏み分け道と思われます。

【引用／『釧路国蝦夷時代史』小助川濱雄】